

「現職参加」
いすゞ自動車株式会社

吉富 佳奈さん
YOSHITOMI Kana

「開発途上国の『現場』を知りたい」
長年抱き続けた思い

大学生のころに旅したインドシナ半島の国々で、発展へのエネルギーにあふれる姿と同時に、親子で物ごいをする姿など貧困に苦しむ側面も目の当たりにした吉富佳奈さん。もともと彼らの生活を知って、貧困をなくすために何かできないか。そう思い立って青年海外協力隊に応募したもの、残念な結果に終わった。それでも、国際協力にかかわる仕事に就きたいという意志は強く、大学院を休学してJICAカンボジア事務所にて在外専門調整員※として勤務。2年間、首都プノンペン事務所で保健分野の案件を担当するJICA職員をサポートなどを担当した。この間に感じたのは、自分の国についてもっと知る必要があるということ。

JICA Volunteer Story

PROFILE

1980年広島県出身。JICAカンボジア事務所(在外専門調整員)を経て、2007年に名古屋大学大学院国際開発研究科修士課程修了後、いすゞ自動車株式会社に入社。ボランティア休職制度を利用し、2010年9月から青年海外協力隊(村落開発普及員)としてマリで活動中。

「生活改善に向けた活動を自立して続けられるようになってほしい」

マリ南部のセグー州で進行する砂漠化を食い止めるためには、貧困層の生活の底上げが欠かせない。青年海外協力隊の吉富佳奈さんは、彼らの生活改善に向け、住民主体のさまざまな活動をサポートしている。



村を巡回して生活改善に向けたアドバイスを行い、植林活動にも取り組む吉富さん

「外に出て初めて、日本の『モノづくり』が海外から高い評価を受けていることを実感しました」。

そこで帰国後は海外とかわる製造業の仕事を目指し、日本を代表する大型ディーゼル車両のメーカーで、世界各地に生産・販売拠点を持つ「いすゞ自動車株式会社」に入社し、アフリカ、中東、オセアニア、東アジア地域で製品保証が社の基準に沿って行われるよう対応したり、情報共有のために各地域で開催される会議をとりまとめてきた。しかし、その間もずっと抱き続けていたのは途上国の『現場』で働きたいという思い。「カンボジアでは首都の事務所勤務だったので、もっと草の根といわれる現場で活動してみたい」と吉富さん。「しかも今度は、顧客に分かりやすく決定事項を説明したり、イベントを企画・運営していきたいです」での経験が、協力隊の活動に生かせると思えました。そして、これが最後のチャンスだと思って応募し、見事に合格した。職場の理解もあり、ボランティア休職制度を利用して、2010年9月からマリ南部のセグー州で村落開発普及員としての活動が始まった。

住民自らが開拓する生活改善への活動をサポート

セグー州の主要産業は農業と畜産だが、人口の増加で農地拡大のために過剰な森林伐採や放牧が行われ、砂漠化が進行。住民たちが主体的に生活を見直し、これ以上砂漠が広がらないように持続可能な開発計画を立てることが必要だった。そこで2000年〜08年まで行われたJICAの「セグー地方南部住民主体の砂漠化防止のための村落開発計画調査」では、砂漠化防止に効果的な植林などの事業と、生活改善に直結する小規模事業を組み合わせて農村開発を推進するアプローチを確立。「このアプローチで、住民たちが生活向上に向けた活動を自立して継続できるように、村を巡回して助言するのが私の役割です」と吉富さん。



a. サノゴラ村を訪れ、マイクロクレジットの台帳をつける委員にアドバイス。お菓子や日用品の販売など、小さな商売を始めたいと借りの住民が多い
b. 住民のニーズを受けて再開した製粉所では、製粉機の故障が頻発しないようメンテナンスを重視してサポート
c. 並木道プロジェクトに協力してくれたサノゴラ村の青年グループと吉富さん(前列右端)、植林隊員の源さん
d. シンザナ村の並木道で一緒に植樹した青年グループのメンバー。点々と続く緑色のかたまりが、家畜に食べられないよう防護用囲いをつけた苗木

具体的なアドバイス方法はこうだ。例えば、銀行からお金を借りられない貧困層に少額融資を行うマイクロクレジット運営の改善。サノゴラ村とコンジャ村では、住民から選ばれた運営委員が週に一度融資や返済の手続きを行う。融資を商売の元手にしたい人は多いため、貸し出し台帳の管理は重要だ。そこで吉富さんは毎週二つの村を訪れ、住民とやりとりする委員に「情報は漏れなく記入しましたか?」「計算は正確ですか?」とフォロー。「責任を明らかにするため、記載した人は必ず自分のサインを書くように習慣づけるなど、小さな積み重ねが効率的な運営につながります」。

ほかにも、シンザナ・ガラ小学校で苗木を育て、近隣の村からの通学路に植樹する「並木道プロジェクト」を植林隊員の源実恵さんと共同で実施。「最高気温が50度近くになる炎天下で子どもたちは通学しています。植樹をして日陰ができれば、生活改善につながるのかもしれない、子どもたちや村の人々が緑の大切さを考えるきっかけになるはず」。吉富さんたちのその提案に、小学校、市役所、各村長が協力し、3つの村の青年グループが約400本を植樹した。今年もさらに範囲を拡大して実施する予定だ。

さらに、シンザナ村では製粉機が故障し休止中だった製粉所を住民とともに再開。製粉機が修理されれば主食のキビなどを手作業でひいたり隣の製粉所まで行かなくてすむため、家事を担当する女性の助けになる。そこで、吉富さんは整理整頓やメンテナンスのアドバイスなど、住民たち自身で製粉所を管理・運営するための体制づくりをサポートしている。

「住民たちのモチベーションを上げ、積極性を引き出すのが難しい場合もありますが、相手が動いてくれるまで何度も足を運んでコミュニケーションをとるようになっています」と吉富さん。「カナが来ると励みになるよ」。住民からの言葉を力に、吉富さんは今後巡回する村を増やし、各活動を着実に前進させていく。

※JICAの海外事務所採用され、案件形成や機材調達など、さまざまな業務のサポートを行う職種。